



温泉 雑談

岡本綺堂

ことしの梅雨も明けて、温泉の時期が来た。この頃では人の顔をみれば、この夏はどちらへお出でになりますかと尋ねたり、尋ねられたりするのが普通であらう。

江戸時代には船根の温泉まで行くにしても、第一日は早朝に江戸を出て、第二日は早朝に船根に着く。第三日にはじめて船根の湯本に着く。但しそれは足の強者な人たちの旅で、同人や女や老人の足踏連れでは、第一日が船根に着き、第二日が湯本、第三日が小田原、第四日に着てはじめて船根に入込むといふのであるから、往復だけでも七八日はかかる。それに船根の日数を加へると、どうしても半月以上を要するのであるから、金と味のある人々でなければ、湯めぐりなどは容易に出来るものではなかつた。

江戸時代ばかりでなく、明治時代になつて東海道線の汽車が通るやうになつても、まご船根まで行くには國府津で汽車に別れる。それから桑合ひのガマ馬車にゆられて、小田原を経て湯本に着く。そこで湯本泊りならば、更に山の上へ登らうとすれば、人力車か山かごに乗るのほかにない。小田原市街が出来る、その不便がやがて救はれたが、それとでも國府津、湯本間だけの交通に止まつて、湯本以上の登山電車が通るやうになつたのは大正のなかば頃からである。そんなわけであるから、一泊でもかたりに無任である。況んや日帰りにおいておやである。

それが今日では一泊はおろか、日帰りでもいさゝかと船根や湯海に遊んでくることが出来るやうになつたのであるから、温泉客の他の宜滞と相持つて、そこらへ浴客が續々吸收せらるゝのも無理はない。それと同時に、浴客の心持も旅館の設備なども全く昔とは異なつてしまつた。

いつの代にも、温泉は下るものは病人と限つたわけでは無い。健康の人間も登山がてらに来浴するのであるが、原則としては温泉は病を癒すところと認められ、大體において病人の浴客が多かつた。それであるから、入浴にくる以上、一泊や二泊で居る客はまづ少い。思つても二週間、長くれば十五日、二十日、あるひは一月以上も滞在するのは珍しくない。私たちの若いときは、江戸以来の習慣で一週間を二回りといひ、二週間を三回りといひ、既に温泉へゆく以上は、少くも一回りは滞在して来なければ、何のために往つたのかわからないといふことになる。二回りか三回り入浴して来なければ、温泉の効目はないものと決められてゐた。

たとひ健康の人間でも、往復の長い時間がかんがへると、一泊や二泊で往復して来ては、わざわざ行つたかひが無いといふことにもなるから、少くも四五日や一週間も滞在するのが普通であつた。

藝藝だより

- ▽清洲會例會 廿五日午後五時麻布市兵衛町團練社、講演「立腹の浮世繪(柳川島の人形劇)」西澤節氏
- ▽プロレタリア映画と寫眞講習會 八月廿五日より九月五日まで、東京小島、會費一般三圓、労働者一圓、申込所市外上落金七九五北川方東京プロキノ
- ▽音楽講習會 八月一日—七日まで武蔵野音楽學校
- ▽日本プロレタリア音楽家同盟第一回大會 二十三日午後五時四谷區旭町二番館
- ▽ロシア舞エスベラント夏季講習會 二十七日より九月五日まで會場及び申込所、神田區今川小路九段ビル内日露協同協會
- ▽對外同志會例會 後六時青山會館にて
- ▽美術雜誌連絡船「新刊」神田表神保町一〇時書生生活社より八月刊刊
- ▽洋學會洋書研究會夜間講習 八月三日—二十二日午後六時内幸町幸ビル内尚書研究會、講師在京春陽會會員
- ▽大國貞藏氏 彫刻アトリエを大阪北區宗屋町大阪ビル内へ移す



温泉 雑談

岡本綺堂

温泉宿へ二日宿み込んだ以上、客もすぐには歸らない。宿屋の方でも向くには歸らないものと認めてゐるから、双方ともに落着いた心持で、そこにおのづからのびやかな気分が作られてゐた。

4段1行目
「もいつの間(ま)にか懸意(こんい)になつて、そ」
なお、()の中は、読み仮名

女中にむかつて兩隣の客はどんな人々であるかを訊く。病人であるか、女づれであるか、子供があるかをせん議した上で、兩隣へ一應のあいさつにゆく。

「今日からお宿へ参りましたから、よろしく願ひます。」
宿の浴衣を着たまゝで行く人もあるが、行儀の好い人は衣服を整へたためて行く。單に荷物のあいさつばかりでなく、何かの土産を持参するものもある。前にもいふ通り、滞在期間が長いから、大抵の客は甘納豆とか金米糖とかいふたぐひの干菓子をつさへてくるので、それを半紙に乗せて盆の上に置き、御返禮でございませうからといつて、土産のしるしに券だすのである。

もらつた方でもそのまゝには濟

まされないから返禮のしるしとして自分が携帯の菓子類を贈る。携帶品のない場合には、その土地のやうかんがせんべいのたくひを賣つて贈る。それが初対面の時ばかりでなく、日を経ていよく懸意になるにしたがつて、時々にすしや果物などの遣り取りをすることもある。

わたしが若いときに宿屋に滞在してゐると、兩隣ともに東京の下町の家族づれでほとんど毎日のやうに色々の物をくれるので、すこぶる有難迷惑に感じたことがある。交際好きの人になると、自分の兩隣はかりでなく、他の座敷の客と

ことも交際してゐるのがある。温泉で懸意になつたのが縁となつて、温泉の宿にも交際をつよげ、果は縁組みをして親類になつたなどといふものもある。

兩隣りにあいさつするのも、土産ものを贈るのも、ことに長く滞在すると思へばこそで、一泊や二泊で立去ると思へば、たがひに面倒なあいさつもしないわけである。こんなあいさつ交際は、一面からいへば前前に相違ないが、又その代りに、浴客同士のあひだに一瞬の楽しみを生じて、ふるまひで出逢つても、廊下で出逢つても、たがひに打解けてあいさつをする。病人などに對しては容態をきく。要するに、一つ宿に滞在する客はみな友達であるといふ風で、なんとなく安らかな心持で夜を送ることが出来る。かうした湯治場気分は今日に求め得られない。

浴客同士のあひだに親しみがあると共に、また温泉の遠慮も在して来て、となりの座敷には病人があるとか、隣の客は勉強してゐるとか思へば、あまりに酒を飲んで騒いだり夜ふけまで呑を打つたりすることはまづ遠慮するやうにもなる。おたがひの遠慮……この美徳はたしかに昔の人に多かつたが、殊に前にいつたやうな事情から、むかしの浴客同士のあひだには遠慮が多く、今日のやうな傍若無人の客は少かつた。

のぎつ 説小新

菊池寛氏作
大久保作次郎氏畫

「勝敗」

明朝紙上より連載

温泉雑談

岡本綺堂

(三)

しかしまた一方から考へると、今日の一般浴客が無遠慮になるといふのも、所せんは一夜泊りのたぐひが多く、浴客同士のおひだに何の親しみもないからであらう。殊に東京近傍の温泉地は一泊または日帰りの客が多く、大きい風呂や作湯をまけて乗込んでくるからいふと、一や四日は滞在するのことに、けふ来て明日はもう立ち去るのが幾らもある。かうなる温泉宿も普通の旅館と同様

て、しぶしぶながら返事をする人が多い。男はもちろん、女でさへも洗面所で顔をあらはせて、お早うはおろか、駄洒落さへもしないのが澤山ある。かういふ人達は外國のホテルに泊つて、見慣らぬ外國人からグッド・モーニングなどを浴せかけられたら、びつくりして宿機へをするかも知れない。そんなことを考へて、私はときどきに可笑くなることもある。

客の心持が變ると共に、温泉宿の妻も若とはまつたく變つた。むかしの名所園遊や風景を見た人はみな承知であらうが、大抵の温泉宿はかやぶき屋根であつた。暖炉以後は次第にその建築も改まつて、東京近傍には流石にかやぶきのあとを絶つたが、明治三十年頃までの温泉宿は、今から思へば實に粗末なものであつた。

座敷があつたとしても、それは僅かに二間か三間で、特別の客をいれる用心に過ぎず、普通はみな八疊か六疊か四疊半の一室で、甚だしきは三疊などといふ狭い部屋もある。

古い座敷には床の間、ちがひだなは設けてあるが、チャブ台もなければ机もない。茶たんすや茶道具なども備へつけてないのが多い。近來はこの温泉旅館にも机すずり、書かんせん、掛筒、電報用紙のたくひは備へつけてあるが、そんなものは一切無い。

それであるから、かういふ所へ来て私たちのもつとも困つたのは机のないことであつた。宿にたのんで何か机をかしてくれといふと大抵の家では迷惑さうな顔をする。やがて女中が運んでくるのは、物置の隅からでも掘りだして来たやうな古机で、抽斗の毀れてゐるのがある脚の折れかゝつてゐるのがあるといふ始末。覆むにも書くにも、實に不便不愉快であるが、仕方がないからまづそれで我慢するのには無難い。したがつて、弄やすすりにしろくなものはない。それでも型ばかりのすずり箱を運びだに置いてある家はいふが、その部屋に女中に頼んですずり箱を借りるやうな家もある。その用心のために、古風の矢立

などを持参してゆく人もあつた。私なども小さいすずりや湯や茶をたづみ行つた。もちろん、温泉宿などは無い時代である。かういふ不便が多々ある代りに、むかしの温泉宿は荷を載ふに足るやうな、安らかなのびやかな気分が宿んでゐた。今の温泉宿は取手が便利である代りに、なんとなくかまづいて居るきのない、一夜とまりの旅館式になつてしまつた。一利一害、まことにやむを得ないであらう。

1段 10行目
「せいせい三日や四日…」

1段 11行目
「と思ふと、」

温泉 雑談

岡本綺堂

温泉の設備不完全なるは一々数
 へ言ふまでもないが、肝心のふ
 る湯とて、今日のやうなマイル登
 りや人道の難業は見られない。
 どこのふる湯も飯盛りである。昔
 道の温泉とちがつて温泉であるか
 ら板の間が奥の内にぬら／＼する。
 近頃は千人ふるとかプールとか皆
 へて、既つて浴そりを大きく作る
 傾きがあるが、むかしの浴そりは

ランプの光をたよりに、夜ふけの
 ふうなどに入つてみると、山嵐の
 霧、谷川の音、なんだか薄気味の
 悪いやうに感じられることもあつ
 た。今日でも地方の山奥の温泉湯
 などへゆけば、こんなところがな
 いでもないが、以前は東京市傍の
 温泉湯が皆こんな有様であつたの
 であるから、現在の豪華に比較し
 て實に隔世の感に堪へない。そん
 なわけであるから、昔から温泉湯
 には怪談が多い。そのなかでやゝ
 異色のものを左に一つ紹介する。
 柳里の「雲霧集」のうちに、
 こんな話がある。

「有馬に湯あみせし時、日くれて
 湯けたの内に、耳目鼻のなきやせ
 湯師の、ひとりほとくといりた
 るを以て、余は大いに驚き、物か
 げよりちかどかちか、早々湯あみ
 して出てゆく處、杖付の婦にたが
 ふところなし。こりども我をた
 ぶらかすにやと、その夜は湯にも
 いらで眠しぬ。夜あけて、この事
 を家あるじに傳りければ、それこ
 そ折よしは來り給ふ人なり。かの
 女形は大阪の遊藝人伏見屋てふ

家のむすめにて、しかも美人の類
 えありけれども、姑の病みておは
 せし時、湯より失火ありて、火の
 早く病床にせまりしかど、助け出
 さん人もなければ、かの尼とびい
 りて抱へ出しまるらせしなり。そ
 のとき湯けたとれたるきずにて、
 目は豆粒ばかりに明きて物見え、
 口は五分ほどあれど食ふに事足
 り、今年はや七十歳ばかりと聞け
 りといへるに、いと有難き人とお
 もひて、彼も折よしは人に難りい
 でぬ。

これは怪談どころか、一種の美
 談であるが、その事情をなんにも
 知らないで、暗いふる湯で突然こ
 んな人物に出逢つては、さすがの
 柳里も太夫もきよつとしたに相違
 ない。元來、温泉は病人の入浴す
 るところで、そのなかには右のご
 とき奇形や異形の人もまじつてゐ
 たであらうから、それらを誤り傳
 へて種々の怪談を生みだした例も
 少くないのであらう。

- (四)
- 1段1行目
「番(ばん)臺の設備不完全…」か？
 - 1段2行目
「へ立(た)てる…」
 - 2段目18行目
「法師(ほうし)」
- なお、()内は読み仮名

温泉 雑談

岡本綺堂

【五】

昔はめつたに無かつたやうに聞
いてゐるが、温泉場は近年流行す
るのは心中さだである。とりわけ
て、東京近郊の温泉場は交通便
の關係から、こゝに二人の死傷
を控むのが多くなつた。旅館の選
ばは、いふに及ばず、警察もその
取締りに苦心してゐるやうである
が、容易にそれを防止し得ないら
しい。

あるといふ。成程それは好都合で
あると喜んでゐると三四日の晩、
町のひきお物屋へ買物に立寄つた
時、偶然あることを感ぜられた。
一月ほど以前、わたしの旅館には
若い男女の戀慕心中があつて、そ
れは二階の何番の座敷であるとい
ふことがわかつた。

その何番はわたしの隣室で、露
分お客をいれないといつたのも無
理はない。そこはもう夢の中に驚
切りになつてゐるらしい。宿へ歸
ると、私はすぐに座敷敷のぞき
に行つた。夏のことであるが、人
のゐない座敷の障子は閉めてあ
る。その障子をあけてうかつた
が、別荘につくやうな異状もな
かつた。

その日もやがて夜となつて、夏
の温泉場も大抵閉まつた。後十
二時頃になると、隣の座敷で女の
軽い咳の聲がきこえる。もちろ
ん、氣のせむだとは思ひながら
も、私は起きてのぞきに行つた。
何事もないのを見ただめて驚つて
くると、やがて又その咳の聲がき
こえる。どうも氣になるので、又
行つてみた。二度目には座敷のま

ん中へ通つて、暗い所にしばらく
座つてゐたが、やはり何事もな
かつた。

わたしが隣座敷へ夜中に再三
入したことを、どうしてか宿の者
に覺られたらしい。その翌日は座
敷の掃除へすると、いふ口實の下
に、わたしはこゝと全く後交遊の
下座敷へ移されてしまつた。何か
結まらぬことをいひ解らされて
は困ると思つたのであらう。然し
女中達は私にむかつて何にもい
なかつた。私はいはなかつた。

これは私の若い時のことである。
それから三四年の後に、「金色夜
叉」の隨筆記者の件が讀賣新聞紙
上に掲げられた。それを讀みなが
ら、私はかんがへた。私かもし一
ヶ月以前に彼の旅館に投宿して、
間一とかなじやうに、隣座敷
の心中の相感をぬすみ聴いたとし
たらば、私はどんな處遇を取つた
であらうか。百一のやうに何千圓
の金を無難作に投げた手力がない
とすれば、所せんは宿の者に密告
して、一まづ彼等の命をつなくと
いふやうな月並の手段をとるのは
かはるまい。百一のやうな金持
でなければ、あゝいゝ立派な解決
はつけられまい。

「金色夜叉」はやはり小説であ
ると、わたしは思つた。(終)

心中もその宿を出て、近所の海
岸から入水するか、山や森へ入り
込んで動物自殺を企てるたぐひは
旅館に迷惑をあたる程度も比較
的に軽いが、自分たちの座敷を結
後の無言に使用されると、旅館は
少からの迷惑を受けることになる。

地獄も旅館の名もしばらく感し
て置くが、わたしが曾てある温泉
旅館に投宿した時、すこし書き物
をするのであるから、なるべく静
かな座敷を貸してくれといふと、
二階の奥まつた座敷へ案内され、
となりへは露分お客をいれないは
ずであるから、こゝは確に閑静で